

# 心で感じる景観の特性について

## 1. 歴史的背景の整理

### (1) 原始

もともと奈良盆地は湖沼地帯で、周囲の山から土砂が流れ込んでだんだん開けていったものである。弥生時代でもその中央部はまだ沼沢地だったという。従って、縄文時代の人々は大和高原や盆地をめぐる大地に住んでいた、当市域では、東部山間部や山麓の丘陵地などがその生活の舞台だったとみられる。大柳生や水間、高円山のふもとから鹿野園にかけて、断片的ではあるが、石鏃など当時の遺物が発見されている。

弥生時代になって稲作が始まると、人々はようやく盆地の周辺に進出し、「むら」をつくって定住するようになった。平城宮跡の南西隅や窪之庄、広大寺池付近では弥生時代の住居跡が発見されている。また、弥生式土器や石器の出土する所も多く、奈良盆地西縁の秋篠や同東縁の山町（山村町）からは銅鐸も見つかっている。

大和を中心とする地域に古墳が現れるのは3世紀末からのことだが、平城宮の北方、佐保から左紀にかけての丘陵には、ウワナベ・コナベ・磐之媛陵・神功皇后陵・日葉酢媛陵などの壮大な前方後円墳から小さなものに至るまで、たくさんの古墳が群がっている。左紀盾列古墳群である。春日山麓の南方、鹿野園・古市・帯解にかけての一带もまた古墳の多いところである。なお、市の西部、富雄谷の丘陵地にも見られ（丸山古墳など）、東部山間の東里・大柳生・田原にも残っている。若草山の頂上には代表的な山上古墳鶯塚があり、三条通の大安寺の杉山古墳など、古墳は平坦部の市街地にも散在し、平城京造営の以前には平城宮跡の北東の所にもあった。

こうした古墳の築造のために、遠くから徴用されてきた者もいたであろうが、その主力になったのは、古墳の近くに住んでいた人たちだったにちがいない。例えば、左紀の古墳群をつくったのは、弥生時代から、その南方平城宮跡のあたりとか秋篠川や佐保川の谷の近くに「むら」をつくっていた人々が主になったであろう。彼らは、水上池のような溜池をつくったり、川からの取水を工夫して米づくりに従事していた人たちであった。左紀に限らず古墳の近くには、人々の日常の居住地があり、その生産の場である田や畑が広がっていたのである。今の奈良市の基盤は、すでにこの時代につくられていたといえよう。

### (2) 古代

古市・帯解を含む春日山麓の南方台地は、もと春日と呼ばれた。「書紀」の伝えるところでは、開化天皇が春日の地に都を移し率川宮をつくったという。崇神紀8年条には、「大彦命と和珥臣の遠祖彦国葦とを遣して山背に向ひ、埴安彦を撃たしめたまふ……則ち精兵を率ゐて進みて那羅山に登りて軍す。時に官軍屯聚みて草木を躡阻す。因りて其山を号けて那羅山と曰ふ」と伝承が載せられている。春日の地に勢いをもったのが、和珥氏であった。和珥氏の本拠はもと天理市の和爾だったが、奈良盆地の北東部に勢力を確立するにしたがって春日氏を称するようになった。その勢力は、和爾から左紀のあたりに及び、多くの后妃を出して皇室との関係も深く、大和でも屈指の豪族であった。左紀の西方、菅原や秋篠には土師氏が住んでいた。平城宮をつくる時、菅原氏の民90余家を移したとある。土師氏の居地は、平城宮跡にも及んでいたのであろう。大陸から渡来人が増えるにつれ、この春日の地の南方、山村から天理市檜のあたりに百濟からの渡来人が定着し、またある者は法華寺の南方、田村の里あたりにも住んだという。

「書紀」によると、5世紀末、影媛の恋人鮪臣が、皇太子（のちの武烈天皇）の命で乃樂山で暗殺された。影媛は天理市石上神宮のあたりに勢力をもつ物部氏の娘であった。涙にぬれながら悲劇の地に急いだ時の悲しみの歌に「石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋を過ぎ 物多に 大宅過ぎ 春日の 春日を過ぎ 妻隠る 小佐保過ぎ 玉筥には 飯さへ盛り 玉盃に 水さへ盛り 泣き沾ち行くも 影媛憐れ」がある。高橋は樺本、大宅は古市付近、影媛は山の辺の道沿いに春日に入り、佐保を経て乃樂山に至ったのである。

「書紀」によれば、天武天皇元年（672）の壬申の乱の折、大伴吹負の軍が乃樂に向かって稗田に至ったとある。奈良盆地を二分する下ツ道を北上してきたものだが、この道は歌姫を越えて山城に通じる。歌姫を中心とする東西の丘陵が乃樂山であり、その南、平城宮跡を含む一帯がナラと呼ばれていたのであろう。一般に古代人の住居に適したなだらかな丘陵地が、平（なら）・坪（ならし）・平地（なるじ）などのナラといわれたのである。ナラには、那羅、奈良、奈羅、檜、平、平城、乃樂、寧樂、諾樂などの漢字があてられたが、奈良期官用には主に平城が用いられ、平安期からはもっぱら奈良が用いられるようになる。

和銅3年（710）ナラの地に平城京がつけられ、藤原京からここに都が移された。その後70余年の間、ならは古代日本の都として栄える。

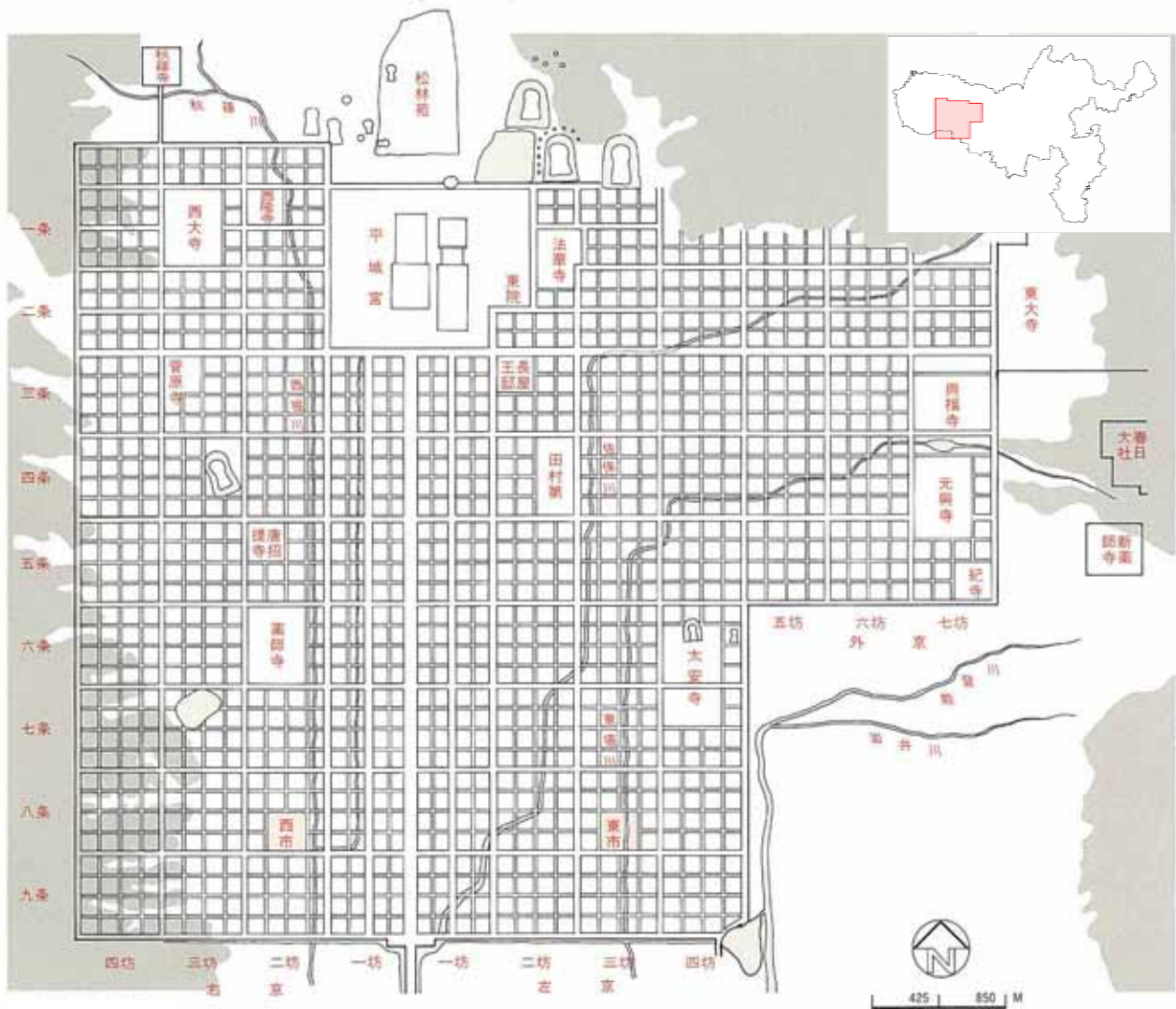


図 平城京全域図

資料：図集 日本都市史（東京大学出版会）

遷都の議は、藤原京ができてわずか10年余の慶雲4年（707）に起こり、翌和銅元年元明天皇は平城奠都の詔を發した。

平城の地は「四禽図に叶い、三山鎮を作し」（続紀）、「天子南面」の相をもつ都にふさわしい地であるというのである。飛鳥地方の旧豪族をおさえて勢力を伸ばそうとした藤原不比等が、この地に勢力を張っていた小野氏と結んで進めた計画だといわれる。百姓の動揺を防ぐため、調租を免ずる措置もとられたが、逃亡する役民も多く、工事は予定どおりに運ばなかった。和銅3年3月、完成を待たずに都が遷された。「続紀」は、翌年「宮垣未だ成らずして防守備ならず」と記している。

平城京は、唐の都長安（現西安）にならって藤原京の規模を拡大したもので、東西32町（約4.3km）、南北36町（約4.8km）の地を占めた（藤原京の約3.3倍、長安の約4分の1）。都城の北辺中央に方8町（約1km四方。ただし、東辺の北約4分の3の部分が東へ250mほど張り出していた）の地をとって平城宮（大内裏）が設けられ、朱雀門から京の表玄関羅城門に向かって南北に走る朱雀大路を境に、東を左京、西を右京に二分し、9条の東西大路と両京をそれぞれ南北に走る4坊の大路によって碁盤の目のように区切られた。数年ほど後に、京城東辺の四坊大路の東にいわゆる外京が加えられた。のちの奈良町はこの外京の地に発展することになる。平城宮には、内裏のほか大極殿や朝集殿などをはじめ、二官八省の官衙が立ち並んでいた。平城宮に近く朱雀大路を挟んで、左京職・右京職が置かれ、左右両京に東西の両市が設けられた。東の市は左京八条三坊（現奈良市東九条町付近）、西の市は右京八条二坊（現大和郡山市九条町市田付近）に位置した。

貴族や役人も京内に宅地を与えられて藤原京から新都に移り住んだ。長屋王や藤原不比等の邸宅は宮殿にまがう豪壮なものだったとみられる。藤原氏の興福寺（官寺に列せられた）をはじめ、薬師寺・元興寺・大安寺などの官寺や伴寺・紀寺・葛木寺などの氏寺など、飛鳥にあった寺院が装いも新たに次々と新京に移された。養老4年（720）すでに48寺を数えたという。

平城京はその最盛期に20万人の人口を数えたといわれてきたが、近年10万人前後だったという説が有力にな

っている。そこには、天皇をはじめ五位以上の貴族約300人を頂点に、様々な階層の人が集まっていた。たくさん僧はもとより、平城宮に勤める約1万人近い中下級の役人、無位の平民のほか、仕丁や役民、奴隷身分の人たちも住んでいた。そして毎年冬になると、各地から調や庸の税を運んでくる農民で都は膨れ上がった。新羅や唐をはじめ、イラン・インド・ベトナムなど異国の人の訪れもあり、平城京は国際色豊かな都市であった。天平9年(737)北九州からはやり始めた天然痘が平城京を襲い、庶民はもとより政権の中核にあった藤原氏の4兄弟をはじめ高官たちの命も奪い、一時政治が滞ったという。そして、3年後の天平12年には、藤原広嗣が九州で反乱を起した。聖武天皇は討伐の軍を送るとともに、平城京を捨てて都を山城の恭仁京に移し、次いで近江の紫香楽宮、摂津の難波宮というふうにより5年の間に転々と皇居を変えた。「立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生えにけり」(万葉集)という歌は、その間の平城京の荒廃をうたったものである。

疫病や内乱による政治の不安を仏の恵みによって解決しようとした天皇は、天平13年国分寺の建立を命じ、さらに同15年紫香楽宮で盧舎那大仏をつくる詔を発した。天皇が平城京に戻った天平17年から、平城京の北東で大仏造営が始まった。養老5年菅原寺(喜光寺)を開いた行基もこれに協力、天平勝宝元年(749)大仏が完成、続いて大仏殿もなり、同4年には華々しい開眼供養が行われた(東大寺の全工事が終わるのは延暦8年)。東大寺の建立と相前後して、平城京の内外に創建される寺院が相次いだ。父藤原不比等の旧宅を皇后宮としていた光明皇后は、天平年間(729~749)末期、ここを法華寺とするとともに東大寺の別院として新薬師寺を建てた。大安寺の僧勤操が高円山のふもとに岩淵寺を開いたのも天平年間で、般若寺も聖武天皇の開創と伝える。天平神護元年(765)東大寺に対して西大寺を建て、光仁天皇の勅願によって秋篠寺も創立される。春日奥山には早くから山岳仏教の道場が開かれていたらしく、それが整備されるのは9世紀の終わり聖宝僧正の頃だが、鹿野園・誓多林・大慈仙・忍辱山(のちの円成寺)・茗荷などは、その道場が地名となったものである。なお、富雄地方にも登美院(隆福寺か)があったらしく、また鳥見寺のあとはのちに霊山寺になるらしい。

大仏造営に協力するため、天平勝宝元年八幡神が宇佐から都に迎えられ、大仏殿の近く(南東)に祀られた。東大寺鎮守八幡宮で、治承の兵火にあい、北条時頼によって現所在地手向山に再建される(現在は手向山神社)。もと春日の地主神を祀っていた所へ、藤原氏によって神護景雲2年(768)春日社が成立する。

大仏の建立は、聖武天皇の意図に反して、奈良後期の政治の混乱と社会不安を生むきっかけになった。天平文化の頂点を示す偉業ではあったが、国費の5分の1を費やした大事業、民衆は重い税や労役に苦しみ、都では物価が6倍にもはねあがったという。天平元年には長屋王の変、天平宝字元年、橘奈良麻呂が藤原仲麻呂を倒そうとして失敗、続いて同8年には藤原仲麻呂が孝謙女帝に近づいて権力を握った道教を除こうとして反乱を起した。平城京は貴族の暗闘の舞台でもあった。

やがて道教は、太政大臣禪師から「法王」になり、皇位にさえつこうとするが、それは朝廷の仏教保護政策が政治の墮落を招いたことの表れであろう。元々多くの寺田や封戸を与えられていた寺院そのものが、墾田永世私有令以後、各地に荘園を広げて経済力を蓄え、押さえきれないほどの勢力をもつようになっていたのである。寺院をはじめ、貴族・豪族による大土地所有の進行は、律令制の基礎を掘り崩すことになった。こうした政治危機を切り抜けるための策の1つとして、都を移すことが考えられた。延暦3年(784)桓武天皇は、平城京を捨てて山城の長岡に遷都、さらに同13年京都に都を定めた。奈良の都は、その政治的生命を失ってたちまちのうちに衰亡した。貞観6年(864)の大和国司の上申に「其後七十七年、都城・道路変じて悉く田畝と為る」(続後紀)とある。

平安遷都にあたって、平城京を飾った諸寺院は奈良の地に残された。奈良が寺院の都として生まれ変わることができたのはそのためである。まもなく官寺として平城京に第一級の格式を誇った薬師・大安・元興・興福・東大・西大の6大寺に法隆寺を加えた7大寺が南都七大寺と呼ばれるようになった。平安京の貴族たちは、旧都への親しみを込めて、南都または南京と呼んだ。当代、寺社が奈良のすべてだったので、南都といえば奈良の寺社を指し、やがて興福寺が全盛を迎えると、興福寺だけを指して「南都の大衆」というように使われもした。奈良の町が発展してくる鎌倉期から南京よりも南都の称が一般化し、奈良町の別称として南都が使われるようになった。南都の名がおこった頃、薬師寺が西ノ京をとえはじめた。

平安遷都は朝廷との結びつきの深かった南都の寺院には大きな痛手となった。遷都後もしばらくは南都が教学の中心で空海も大安寺や東大寺に学んでいるが、東寺や延暦寺が勢いを増し、各地に次々と寺院が建てられてくると、南都七大寺の影は薄くなり、官寺としての待遇も形ばかりのものとなっていった。しかし、全国寺院の総本山として殊遇を受けた東大寺と藤原氏の氏寺として保護の厚かった興福寺はその勢威を維持して強大となった。東大寺と興福寺が勢いを大きくしたのは9世紀の半ば過ぎ貞観年間(859~877)のことだが、その頃、春日社も規模を広げ、ほぼ現在のような姿となったという。

斉衡2年(855)の地震で東大寺大仏の頭部が落ち、貞観3年その復興供養の法会が行われたが、それは開眼供

養にも比べられる盛大なものだったという。その後東大寺は皇室の氏寺としての色彩を強めながら荘園領主として大きく発展した。鎮守である八幡宮の転害会も勅祭として整い、11世紀の前半には、年中槌の音の鳴り響いているのは小野宮（藤原実資邸）と東大寺（大鏡）だといわれるほどになる。藤原氏が政権を握ると、その氏寺である興福寺と氏神である春日社が政権が力を伸ばした。藤原氏から相次いで荘園が寄進されて寺領が広がり、朝廷の保護も加えられるようになった、春日社では貞観元年に2月と11月の春日祭の儀式が確立し、興福寺では同11年に東西金堂の修二会が始まり、維摩会など12の大法会も盛んになった。興福寺や東大寺が勢い大きくするにつれ、寺の内外に子院がつくられていった。やがて平安貴族の子弟がそこに入って院家と呼ばれるようになるが、皇族や摂関家の貴種が入ると、特に門跡と呼ばれた。興福寺では、一乗院と大乘院の両門跡が力をもち、院家はこれに属した。

平安京の貴族たちは、物見遊山を兼ねて寺社詣に出かけることも多くなった。洛中洛外はもとより、長谷詣でや金峰山詣をはじめ、高野山や熊野三山に足を運んだが、南都もその好適地とされ、南都七大寺の巡礼や春日詣が盛んになった。院政時代には上皇御幸や氏長者の春日詣でが頻繁になり、大江親通によって「七大寺日記」（嘉承元年）や「七大寺巡礼私記」（保延6年）が著される。こうした寺社詣が縁で、法会や祭礼のために皇室や藤原氏から多くの荘園が寄進された。

### （3）中世

興福寺の発展は、藤原氏の保護を受けて大和を中心に多くの荘園をもったためだが、12世紀に入ってその全盛期を迎えた。興福寺は10世紀の中頃から春日社に進出し、春日社と興福寺は一体だと主張して11世紀末にはほぼその実権を握った。保延元年（1135）には春日若宮社を興し、翌年から若宮祭（おん祭）を始めて春日社を完全に支配下に収める。興福寺は、春日社の神威をかざして、東大寺と多武峰を除く大和の寺社を次々にその末寺・末社にしていった。そのため、大和土着の武士たちも興福寺に従うことになった。また、大和は春日大明神の領国たる神国であり、その代官は興福寺だという論理をかざして国司を追放し、大和の行政権も握ってしまう。それから14世紀まで興福寺の全盛期が続いた。

興福寺がこのように力を伸ばすことができたのは、大衆と呼ばれた僧兵の武力によるところも大きかった。10世紀中頃から大きな寺院では僧兵を養うようになった。大和では東大寺をはじめ、長谷寺・多武峰・金峰山などがこれを擁していたが、大和武士を編制に加えた興福寺の僧兵団が、奈良法師と呼ばれてとりわけ強大な力を誇った。彼らが春日社の神木を奉じて（神木動座）京都に押しかけ、しばしば朝廷に強訴した。

治承4年（1180）源平の争乱が起こると、かねて平氏に反感をもっていた南都の僧兵は、反平氏の旗を掲げた。平清盛は、その子重衡に4万の大軍を与えて南都の討伐に向かわせた。東大寺・興福寺の僧兵7000余人が奈良坂にこれを迎撃したが、12月28日の決戦に敗れた。兵士の軍勢はなだれのように奈良に乱入、その放った火は、烈風にあおられて東大寺や興福寺の堂塔を焼き、民家も大部分が類焼した。率川社や佐保殿も焼けたといわれ、奈良はほとんど全滅に近い被害を受けたといつてよい。

源平争乱の最中であつたが、翌養和元年（1181）早くも南都の復興事業が始まった。朝廷からの援助もあつて、興福寺は建久5年（1194）にほぼ元通りの姿に復興した。東大寺の再建は、朝廷を中心とする国家事業として進められ、大勧進には重源が任じられた。宋の工人陳和卿の技術的援助もあつて、文治元年（1185）大仏の鑄造が完成、建久6年に至って大仏殿も竣工した。その落慶供養には、後鳥羽上皇以下多数の公卿が南都に下向、源頼朝も軍勢を従えて参列した。南大門ができるのはそれから4年後のこと、講堂や僧房の再建は重源の死後に残されたが、南都諸寺の復興は、康慶・運慶ら奈良仏師に活躍の場を与えた。慶派の仏師たちは、気力にあふれた数々の作品をつくり、奈良を鎌倉美術の宝庫にした。

こうした動きに応じて、南都仏教も力強くよみがえった。すでに12世紀初めから春日版と呼ばれる仏典の翻刻が盛んになり、唐招提寺や東大寺の戒壇を修理して戒律の立直しに努めた実範の活動など、仏教革新の兆しがみえていたが、新仏教の発展はこうした動きを刺激した。明恵上人高弁が南都仏教に新しい息吹を与え、そのあとを受けて東大寺に宗性や疑念が現れた。中川寺の実範の門から解脱上人貞慶や西大寺の叡尊（興正菩薩）、唐招提寺の覚盛（大悲菩薩）が出て、ともに戒律の復興に力を尽くした。叡尊とともに社会事業に尽くした弟子忍性は、ハンセン病患者の救済のため北山十八間戸を建てる。また、浄土教の発展につれて、元興寺の中心は智光曼荼羅を蔵する極楽坊に移っていったが、その念仏講は鎌倉木になって一段と発展、極楽坊は民衆の信仰の場となった。東大寺二月堂や興福寺南円堂の観音にも民衆の信仰が集まり始める。

頼朝が守護を大和に入れなかったため、大和の行政権を握っていた興福寺は守護職の地位を固めた。その軍事力の中核となったのは僧兵だが、興福寺は寺領内の在地領主に僧の身分を与え、衆徒と名付けて僧兵団に編成し、次いで南大和に多かった国衙領の武士たちにも春日社神人の身分を与え、国民と名付けて僧兵団に加えた。こう

して大和は、朝廷・幕府の支配を免れた寺社の王国となり、ならはその首都、寺社の都となった。

寺社が発展するにつれて、その周りに住む人が増え、次第に「まち」ができるようになった。寺人や社人の居館が境内地の外にはみ出し、平民をはじめ商人や工人の小屋も周りに立ち並ぶようになってきた。平安末期 11～12 世紀頃のこと、これらの「まち」は郷と呼ばれた。いわゆる門前郷である。郷は、薬師寺や西大寺の門前にも生まれたが、寺勢が振るわなかったため、それらは農民の郷にとどまった。興福寺や春日社、東大寺や元興寺の周りにできた郷が発達して、奈良町のもとがつくられることになる。これらの社寺は、郷を境内に囲い込んで寺領に加えたが、とりわけ興福寺は勢いにまかせてその境域を広げ、12 世紀には旧奈良町の中心部を興福寺の郷に取り込んだ。

治承の兵火で、奈良の郷は全滅に使い打撃を受けたが、復興事業が活発に進められたおかげで、人と物資が奈良に集中し、郷は以前にも増して充実したものとなった。現在の町にあたる小郷が続々と成立し、13 世紀には郷の組織も整った。興福寺では、院家の一乗院・大乘院の両門跡が独立した地歩を確立したので、興福寺の郷は、寺門郷（別当郷）と一乗院門跡郷と大乘院門跡郷の 3 つに別れた。なお、治承の兵火のあと、大乘院は元興寺の別院禅定院（現奈良ホテルの地）に移り、周りの小郷を大乘院門跡郷とするとともに、元興寺郷をその支配下に置いた。一乗院門跡郷は、寺門跡の西と北に成立した。そして、東大寺の西辺、京都街道に沿って生まれた 7 小郷が東大寺七郷とされた。こうして 13 世紀末にはのちの奈良町の原型がほぼ整った。

郷には、たとえば社家の高島郷、農民の多い北御門・佐保田郷、旅宿の多い転害郷などがあって、郷民の構成はさまざまだったが、興福寺南方の諸郷や東大寺七郷には商工業者が多く、概していえば当時の奈良はもはや商工業に根を下した堅実な町の姿だったといえる。その後、商工業の発展につれて次々と新しい郷が生まれ、16 世紀の始めには郷数 200 を数えるに至る。

郷民は、それぞれの郷の領主である寺や門跡の支配を受け、地子・夫役を負担したが、やがて町役もかけられるようになる。大和守護職を任された興福寺が治安警察にあたったが、南北朝期の頃から、警察権は衆徒のうちから選ばれて寺中に住んだ 20 人の衆中（官符衆徒）の手に移った。

商工業が活発になるにつれ、鎌倉期中頃の一乗院門跡郷に北市が設けられ、続いて 14 世紀の初め大乘院門跡が紀寺郷に南市を開いた。その後、応永 21 年（1414）に興福寺の六方衆徒が寺門郷の南西隅、子守社（率川社）の近くに中市をつくったので、しばらくは 3 つの市が鼎立して繁栄を競った。3 日に 1 度ずつ輪番に開かれたので、毎日市中で市が立ったことになる。応永 14 年南市には、米・魚・塩などの食料品をはじめ、絹・布・小袖・綿・苧などの衣料類、鍋・釜・桶・神などの雑貨類その他日用必需品 31 種の座が店を出している。その座衆たちは、集会所をもと、市場法も定め、代表者を選んで自治的に市の運営にあたった。

座の初見は、寿永 2 年（1183）春日若宮社に属する酒座だが、その後工匠・細工・商業・芸能など様々な座が生まれ、14 世紀初頃から符坂の油座が活躍したことが知られる。

長祿 2 年（1458）頃一乗院と大乘院に属する座に、米・麦・素麺・心太・飴・蒟蒻・茶・塩・油・檜物・火鉢・土器・鍋・傘・漆・紺・塗師その他合わせて 80 種以上の座があったという。符坂の油座の場合、座衆は諸郷に分散して住んでおり、大和の国中に散在している者もあった。座衆は市に店を出すほか町のなかを行商して歩いたが、なかには立売りしていた者もいたらしい。また、京都へ赴いたり、貝新座の寄人のように生業のかたわら、四ノノまで鉄を売り歩いた者もいた。やがて店を構える者が増えるにつれて市が衰え、15 世紀には中市を残すのみとなる。

商工業の発展に伴い、富裕な郷民も現れた。嘉元 2 年（1304）の東大寺郷の調査によると、すでにその頃転害に上 4・中 2・下 1、今小路に上 2・下 4、押上に中 1・下 4、合計 18 人の有徳人があったという。富裕な郷民の中には、土倉を営む者が多く、僧の身分で土倉を営む者もあった。15 世紀の終わり頃、奈良では大小 200 軒以上の土倉を数えたという。

天長の土一揆は奈良にも及び、鳥見（富雄）・生駒の馬借を中心とする一揆勢が、西大寺・法華寺に立てこもり、木津方面からも一揆勢が進出、興福寺では衆中の議決によって徳政令を発した。柳生神戸郷の農民は、石仏に「正長元年ヨリサキ者カンへ四カンカウニヲキメアルヘカラス」と刻んでその勝利を記念した。その後 17 世紀に至るまで、奈良はしばしば土一揆に襲われた。たとえば、宝徳 3 年（1451）の土一揆のため、極楽坊を残して元興寺の堂塔が焼失するということがあ

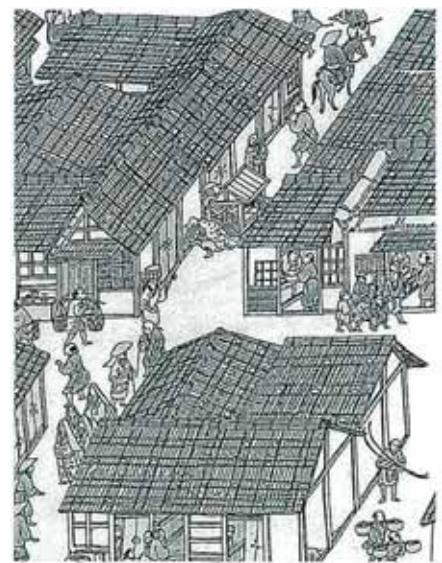


図 中世の奈良町絵

資料：景観・創造・まちづくり奈良町  
(奈良市都市計画部計画課)

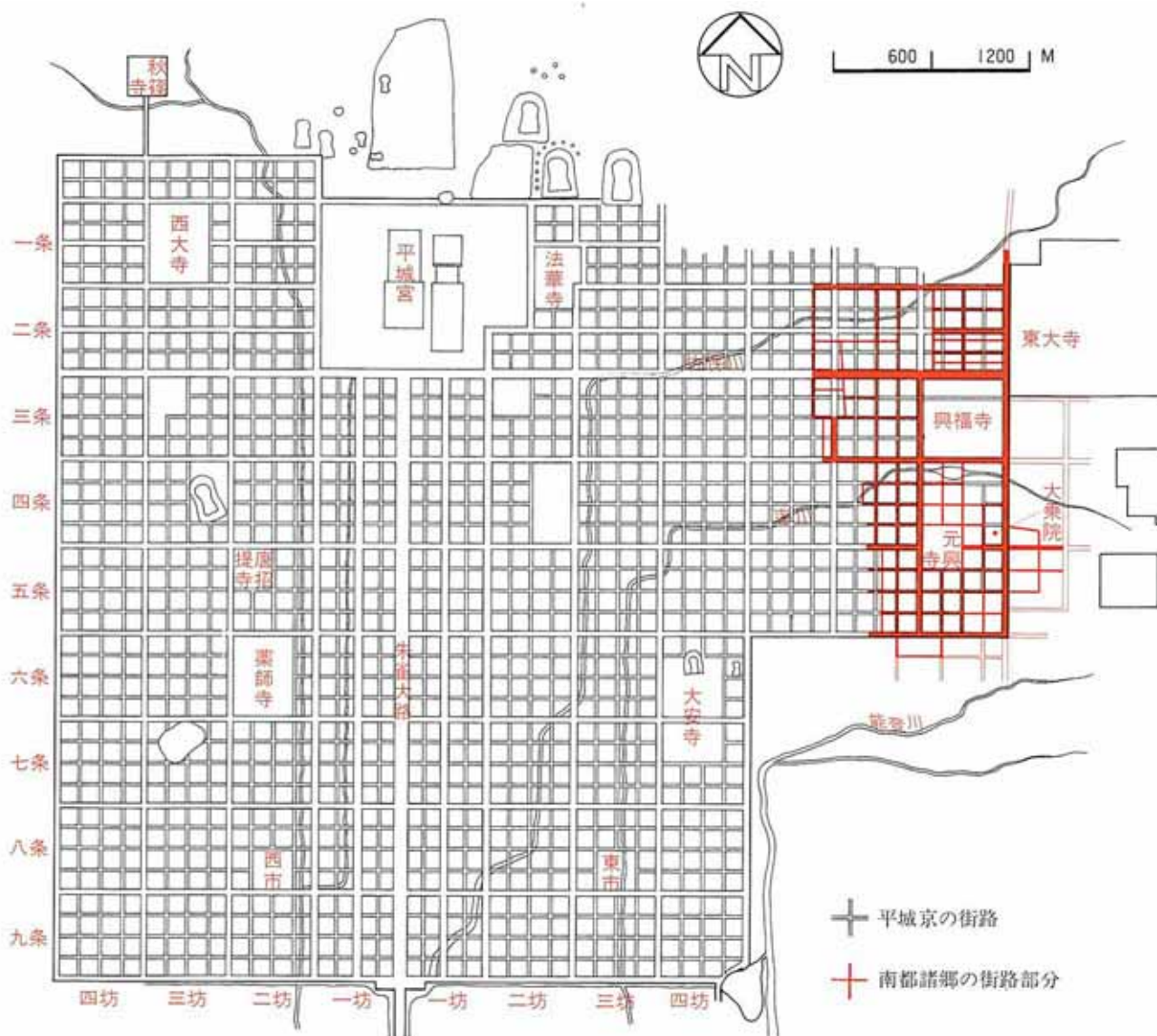


図 平城京と奈良町の関係

資料: 図集 日本都市史 (東京大学出版会)

り、文正元年 (1466) には、馬借が福智院郷・松谷郷を襲ったのに乗じて、奈良の郷民も立ち上がっている。また、文明 17 年 (1485) には土一揆が「大和国惣百姓」の名をもって徳政を要求し、奈良を四方から囲んだこともあった。

郷民の成長に伴い、東大寺郷では、転害会や祇園祭に郷民の参加が許されるようになり、興福寺郷では、春日祭や若宮祭への参加は認められなかったものの、その末社の祭礼が郷民の祭りとなった。なかでも大乘院門跡の鎮守天満社の小五月会が有名で、14 世紀半ば頃から興福寺に属した円満井 (金春) 座に、坂戸 (金剛)・外山 (宝生)・結崎 (観世) の猿楽 3 座が加わり、大和四座と呼ばれて活躍した。世阿弥もその指導にあたっているし、將軍義満や義教もその見物に下向している。能のほかに曲舞や千秋万歳などの民間芸能も発達して人々に迎えられたが、これらを支配する声聞師も座をつくって興福寺に属した。

15 世紀半ば過ぎ、世阿弥とその子が京都から招かれて大乘院の庭をつくっている。次いで茶道の祖、村田珠光が現れる、彼は中御門郷に生まれ称名寺に入ったが、のちに京都に出て活躍、一休和尚に学んで侘び茶を創始したといわれる。その一の弟子が、大乘院門跡坊人の衆徒で、古市の城主古市播磨公澄胤であった。澄胤は豪華な生活を送り、連歌・謡曲・尺八・蹴鞠・馬術などにも巧みだったという。

応仁の乱後、興福寺はかつての勢威を失い、郷民たちも社寺の支配を離れて町民として自立しようとするようになった。「奈良町人」という言葉も現れる。16 世紀初めには人口 2 万 5,000 人に達し、京都・堺と並んで三都の 1 つに数えられるようになる。応仁の乱を避けて、京都の公卿や町人が奈良に疎開してきた関係もあり、京都と奈良の関係は一層密接になり、堺との交流も深まった。天文年間 (1532~1555) 末年に、2 都市あるいは 3 都市にまたがって店を構える町人も少なくなかった。寺社の枠を超えて郷と郷との連合が進み、16 世紀の初め頃には、三条通を境に南里と北里に分かれ、それぞれの集会所をもつようになっている。こうして町の運営や治安

を自分たちで担っていこうとする自治的な動きが高まった。

#### (4) 近世

##### 【織豊期】

戦国動乱のなかで寺社王国の伝統が保たれ、郷民の成長によって商工業が発達していた奈良は、永禄年間(1558～1570)になって新しい封建的な武士の権力を迎えることとなる。永禄2年(1559)、信貴井山城に拠っていた松永久秀は大和に侵入し、村々や寺社を焼き払いつつ筒井藤勝(順慶)をうち破り、奈良を占領した。永禄3年(1560)、久秀は興福寺を脚下に見下ろし大和盆地を一望できる眉間寺山に多聞城を築いた。この多聞城は、四層の櫓がそびえる相閣を極めたものであり、柱や壁・戸・襖などには優れた障壁画が描かれ、茶道具などの調度品が収蔵され、数寄屋建築も付属していたこと、また町人らを招いて茶会などをしばしば催していたことも記録にみえる。近世初期に造営された城郭に多聞櫓が築かれるが、その菜がこの城に起因するとまでいわれているところからみても、これが城郭の模範とされていたことが察しられる。多聞城築城ののち、堺・京都を握って勢力を振るった久秀の勢力はますます強くなった。しかし、久秀が権力を強めてくるにつれて、元々同志であった三好三人衆と対立しはじめ、東大寺・興福寺を挟んで合戦を繰り返した。永禄10年(1567)10月には、久秀は、大仏殿に拠っていた三好勢に夜討ちをかけ、その火矢によって大仏殿は大仏とともに焼けて落ちている。この局面は、織田信長の台頭によって大きく転回し、久秀は信長の後援を得て三好勢を一掃している。その後、天正元年(1573)久秀は信長に反し、敗れて信貴井山城に退き、多聞城へは明智光秀、柴田勝家らが城番として入った。天正3年(1575)、信長は塙直政を大和守護に任じて、大和を領国とし、奈良をその直轄領とした。ここに、中世以来の興福寺の大和守護職は終わりを告げた。翌年には筒井順慶の大和支配を認めて守護職とし、天正5年(1577)順慶に命じて久秀を滅ぼし、多聞城を破却している。このとき、その殿舎は信長の二条城に送られ、城の石は郡山に運ばれた。

このように、松永久秀の大和侵入以来、奈良とその周辺は幾度かの戦禍を受け、大仏をはじめ焼亡した町や寺院もあった。しかし、奈良は、この戦国末期の争乱の本舞台となりながらも、この間に商工業を発展させ、郷民は町民へと大きく成長して自治組織を形成してきた。それは、久秀や信長が、奈良という都市の富力をあまり傷つけることなく自らのものにしようとした政策と、奈良の寺社や郷の人たちの自衛の努力によるものであった。また、戦国期の動乱のなかで、奈良が城下町とならなかったことこそ、奈良のもつ歴史の重みによるということができるとともに、近世奈良のあり方を決定したものであった。

信長に代わった豊臣秀吉は、天正13年筒井順慶の養子定次を伊賀に移し、弟秀長を郡山城に入れて大和・紀伊・泉の3国を支配させた。この筒井氏の伊賀移封は、順慶がもともと興福寺の衆徒であって春日社の造替に努力し、春日若宮祭礼の田楽頭役をつとめ、興福寺から僧都に叙せられるなど興福寺と密着していたため、寺社を在地勢力から切り離そうとする秀吉の政策からみて、筒井氏が大和にいることが好ましいことではなかったからと推測されている。

豊臣秀吉は、郡山城入城後ただちに奈良の商業に圧力を加えた。これは、城下町郡山の商業を発展させること、また、奈良の郷民と興福寺などの寺社との結びつきを断つことが目的であったと考えられている。商業禁止令により、市場を禁止し、他国の酒の移入や味噌・酒・柴木などの商売や質屋の営業を禁止するとともに、しばしば奈良の町民を労役に徴用した。このように、奈良は城下町郡山の繁栄策のために犠牲になった面もあるが、秀吉政権の寺社弾圧の狙いは、寺社のもつ領主的性格を除くためであり、その目的が達しられた時には、ある程度の保護が加えられたため、寺社の存在がなお大きな比重を占めていた奈良は直ちに衰運を辿ったわけではなかった。特に裕福な町人は、支配者として乗り込んできた武士と、なお文化の担い手として力のあった僧侶・社家とともに社交界を形成していた。彼らは茶会などを盛んに開き、秀吉の北野大茶会には、茶匠松屋源三郎久政ら36人の僧俗奈良衆が参加している。また、当時、南市から里村紹昌が現れ、連歌も盛んに行われ、春日社禰宜の能狂言が人気を呼んだ。

##### 【江戸期】

徳川家康は、大久保長安を国奉行として大和を支配させた。長安は、その下代衆を奈良に派遣して治政にあたらせた。慶長7年(1602)から3か年にわたって

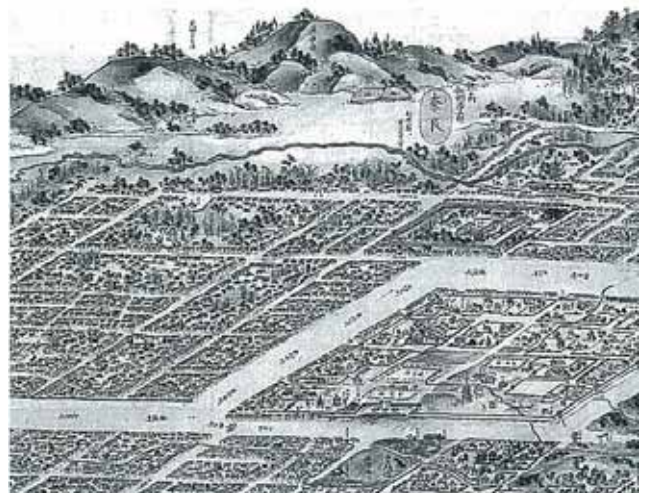


図 江戸時代の奈良町(加太越奈良道見取絵図)

資料: 景観・創造・まちづくり奈良町(奈良市都市計画部計画課)



図 奈良町絵図 (江戸中期：享保・元文)

資料：天理図書館所蔵旧保井家文庫

屋地子帳改めが行われ、各町の境界が確定した。奈良の諸郷は町と称することを公認され、奈良町 100 町が成立した。さらに、文禄検地で村に格付けされた街地続きの 25 村も地方町として奈良町に編入された。慶長 18 年(1613) 奈良奉行が置かれると、興福寺領の高畠・紀寺・木辻・三条の諸村をはじめ寺社境内地も地方町に準じた扱いを受け、奈良町に含められた。この奈良町を取り巻いて、幕府領である城戸・油坂・杉ヶ町・芝辻・法蓮・京終・川上・野田のいわゆる奈良回り八か村があり、これらの村も奈良奉行の支配下にあったので、これらも加えて広義の奈良(奈良領)が成立する。寛永 11 年(1634) 徳川家光が上洛の折、奈良町 100 町と地方町 25 町に地子免許の特権が与えられた。やがて興福寺領の木辻町に浄言寺・中・瓦・五軒家・八軒家・十三軒家・錦屋の 7 町が生まれたように、いくつかの町ができていき、元禄 11 年(1698)には、惣奈良町は奉行直轄下の 137 町と社寺下表 奈良町の高札場

資料：奈良市史

町名	種類
橋本町	忠孝札、とたん札、毒薬札、人売買札、吉利支丹札、捨馬札、捨子札、御朱印伝馬札
奈良坂村	忠孝札、毒薬札、吉利支丹札、とたん札、人売買札、捨馬札、捨子札
芝辻村、法蓮村 杉ヶ町村、柳町 油坂村、下三条口 不空院辻、京終村 城戸村、中辻町 野田村、川上村	吉利支丹札 捨馬札

江戸時代の奈良町支配の中樞は奈良奉行であった。初代奈良奉行中坊飛騨守秀政は、当初椿井町の自宅を奉行屋敷としていたが、しばらくして北魚屋町(現奈良女子大学の地)に本格的な奉行所を造営した。東は鍋屋町黒門通りを北へ見通し、南は宿院町裏まで、西は南法蓮町の東面に接し、北は北魚屋西町の裏にまで



及んでいた。2代目奉行中坊時祐の時、与力6騎、同心30人が付置され、3代目土屋利次の時、郷同心20人が置かれて奉行所の機構も整った。同年、奈良代官（南都代官）が新設され、奈良奉行の代官兼務が解かれる。

中坊氏は奈良町寺社勢力と深い関係を持っていたが、寛文4年（1664）奥州荒居奉行から転じてきた旗本土屋利次は奈良町寺社勢力との個人的なつながりをもたないため、就任以来町火消役新設問題（寛文6年（1666））、薪能縄張事件（同年）、春日神鹿殺傷事件（寛文8年（1668））など相次いで奈良町寺社勢力との間に摩擦を引き起こした。統一的な全国支配を推し進める幕府と、それに抵抗する奈良町寺社勢力の二つの力の相克の間から、近世都市としての奈良町が生まれている。

奉行の指示を受けて惣年寄が町政にあたった。当初は有力町人から惣年寄が選ばれ、その人数も5～6人と一定しなかったが、延宝7年（1679）から清水・石井・徳田の3家が世襲となり、享保2年（1717）から西村家加わって4家となり、以後惣年寄はこの四家の家付の職となって幕末に及んだ。会所は大久保長安が代官屋敷を大豆山郷に移転した後の建物を利用したもので椿井町に位置した。惣年寄のもとで実務を担当したのが町代で、2人の上町代が奈良町を南北に二分してそれぞれの地区を担当し、下町代3人がこれを補佐した。

奉行所は町民の守らねばならない事柄を触書の回達のほかに木札に書き、各所に掲示場「御高札場」をつくって立てた。「庁中漫録」によると、奈良町には、奈良町の中心橋本町と町の主な出入り口である奈良坂村、不空院辻、中辻町、柳町、下三条口と奈良回り八か村にあったことがわかる。

徳川政権の寺社政策は豊臣政権にならぬ、寺社の活動を宗教的・文化的なものに限定し、政治的な係わりを一切認めないものであった。寺社支配のため、各宗派や寺社毎にそれぞれ法度を定め、寛文5年（1665）には全国の寺院・僧侶に対して、本末関係や僧侶の日常生活・寺院の修復のことなどについて細かく定めた「諸宗寺院法度」を發布した。そして一方で、寺社の宗教的・文化的活動を保証するために一定の所領（朱印領）を与えて経済的基盤を安定させた。最も大きい興福寺の朱印領は、一乗院・大乘院の両門跡領や諸坊領から春日神社領までを含み、その地域は三条・木辻・紀寺・高畑の4村を中心にして、奈良町南郊の白毫寺・大安寺村から横田・若槻村など現在の和歌山県東部一帯にまで及んでいた。東大寺の場合は、添上郡樺本村（現天理市）に所領の大部分があつたが、他に現奈良市域の野田村に151石があつた。このほか奈良町の中小寺社の所領は、法華寺・法蓮・川上・野だ・肘塚の諸村などに細かく分散されて与えられた。このうち小所領を法華寺・法蓮・肘塚の3村に与えられた寺は13か寺として一括され、互いに連絡をとりあつていた。こうして近世奈良町周辺に複雑な支配関係をもたらした。

惣奈良町以外の奈良市域の村々は、幕府領のほか、柳生藩領・伊勢津藩領・郡山藩領に分属したほか、大安寺村などの興福寺領、東九条村などの春日神領や石河・角南などの多くの旗本知行地に属し、複雑な領主変遷を繰り返した。江戸期における村々としては、「元禄郷帳」に合計130か村が見える。

### 【産業】

中世以降商工業に根を下した堅実な町として歩んできた奈良は、近世に入ると「南都随一」の産業とうたわれた奈良晒を中心に産業都市として発展した。正保2年（1645）の「毛吹草」によって17世紀中葉の奈良の「古今ノ名物」をみると、以下のように、細美から蚊帳地までの奈良晒にかかわる麻織物や中継・土風爐・灰ボウロクなどの茶道関係のものなど数多くのものがあげられている。

細美（サイミ） 瀑（サラシ） 平布（ヒラヌノ） 縮（チヂミ） 嶋布（シマヌノ） 畦布（ウネヌノ） 衣地（コロモチ） 蚊帳地（カチャウヂ） 具足（グソク） 錠（アブミ） 作緑青（ツクリロクウ） 曆（コユミ） 扣薄（ウチバク） 油煙墨（ユエンノスミ） 色墨（イロズミ） 中継（ナカツギ） 土風爐（ツチプロ） 塗桶（ヌリオケ） 瓦燈（クハトウ） 灰（ハイ） ボウロク 早鍋（ワサナベ） 付硫磺（ツケイワウ） 膠（ニカワ） 鞠（マリ） 馬皮（バヒ） 滑（ナメシ） 金剛（キンガウ） 指縄（サシナハ） 箒（ハハキ） 渋団扇（シブウチハ） 法論味噌（ホロンミソ） イロリ 漬香物（ツケガウノモノ） 溜糖（シルアメ） 饅頭（マンヂウ） 飯鯨（イヒズシ） 僧坊酒（ソウバウザケ） 東大寺蘭奢待（トウダイジノランジヤタイ） 興福寺銀杏（コウフクジノギンアン） 春

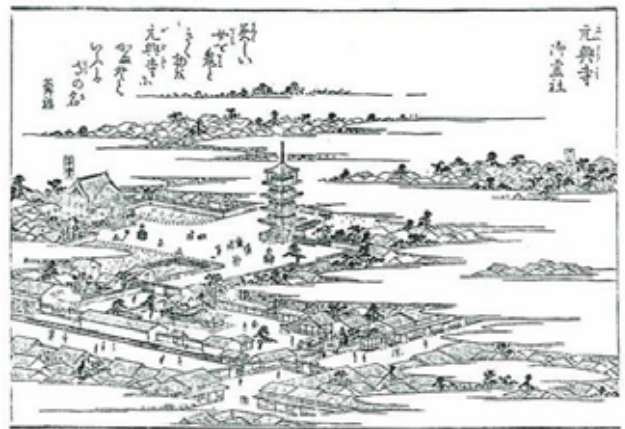


図 大和名所記による元興寺周辺の町なみ

資料：奈良町一町なみ再発見（奈良市教育委員会）

日山櫟（カスガノイチイ） 祢宜屋敷木練柿（ネギヤシキノコネリガキ） 西大寺豊心丹（サイダイジノハウシントン） 法華寺作土小犬（ホッケジノツクリツチノコイヌ） 薬師寺造花（ヤクシジノツクリバナ）

元禄15年（1702）の作とみられる「南都名所記」は、その末尾に「ならのめいぶつ」として以下があげられている。

一 ぐそく 一 さらし 一 ゆえんすみ 一 さけ  
一 もんじゅ四郎小がたな 一 まんぢう 一 西大寺ほうしんたん  
一 うちは 一 ほつけ寺つちいね

正徳2年（1712）に出た図説百科辞典「和漢三才図会」では「大和土産」の項に次のものがあげられている。油煙墨（奈良） 曝布（同） 団扇（同） 諸白酒（同囊） 塗桶（同） 土風炉（同） 豊心丹（丸薬出ス於西大寺ヨリ） 銀杏（興福寺） 櫟（春日） 鹿（同）

正徳3年（1713）、村井古道の書いた俳文集「南都名産文集」は次の41品目に及ぶ名産について述べている。油煙墨 晒布 僧坊酒 饅頭 団扇 奈良刀 文殊小刀 法論味噌 餛飩 甲冑 奈良漬 膠 諷 木練柿 滑飴糖 薄奈良緑青 藺草履 糸鞋 中継 大鼓 奈良茶 飯酢 白牡丹 春日砥 春日盆 櫟 梵天瓜 奈良曆 奈良台 鎌 布機 石渕石 元興寺籠 奈良鐘 水屋納豆 坏手 狂言袴 豊心丹 南都風炉 法華寺犬

享保12年（1727）、村井古道が書いた「奈良名所記」では、その序にあたるところで、「元来神社仏閣名所旧跡すくなからず、名産の品々も又数多にして就中晒布を以て最上の産業となす、其訳の名物略ここに記す」として、以下の名をあげている。

晒布 刀 刺刀 酒 油煙墨 饅頭 団扇 鎧 兜 法論味噌 膠 草履 土風炉 大鼓皮 木練柿 滑飴 香物嶋台 鎌 曆 緑青 豊心丹 法華寺作犬 糸鞋 白牡丹 雲茸

享保21年（1736）の「日本輿地通志」畿内大和国（「大和志」と称す）は、添上郡及び添下郡の「土産」のうち「製造」として以下のものをあげている。

曆本 甲冑 刀劔 踏燈（アブミ） 漂布（サラシ） 墨 団扇 酒 糟瓜（ナラツケ） 饅頭 藺履 木綿鞆（タビ） 法論味噌 鼓油（イロリ） 豆腐 泥犬（ツチイヌ） 袈裟 浦薦（ウラコモ） 石凍幹（ネリイシキツツ） 皮飩（セキタ） 豊心丹 陶壺 埴炉 土盃（カハラケ）

安永7年（1778）の「和州南都之図」には「土産」として以下があげられている。

奈良晒 油煙墨 団 奈良刀 南都諸白 霰さけ 法論味噌 足袋 奈良草履

嘉永2年（1849）の「大和国細見図」が掲げる「國中名産略記」では、以下があげられている。

晒布 団扇 大和柿 酒 墨 春日盆 土器 グソク 十文字稽古槍 練革鞍 刀 筆 春日藤 石墨 禹餘糧 石燈籠 木燈籠 鼓皮 土風炉 練鹿 奈良人形 鹿角細工 換掌棧 居伝坊 火打焼 糟漬 瓜 櫟実 春日野味噌 蕨餅 金剛草履 足袋 土偶犬 豊心丹

このように、近世奈良には多様な土産があり、なかでも共通にみられるものは、奈良晒、酒、墨、武具、団扇などである。

### 【観光の町へ】

元禄5年（1692）公慶上人の努力が実って、東大寺の大仏が再建された。奈良の町民も、大仏講をつくるなどしてこれに協力した。その開眼供養の行われた1か月間は、諸国からの参詣人が相次ぎ、奈良は空前のにぎわいをみせた。大仏殿の再興には、奈良出身の僧隆光の請願を受けた5代将軍綱吉の母桂昌院の働きかけがあつて、幕府の積極的な援助を得ることができた。この前後が、近世奈良の最盛期であつた。しかしながら酒や武具がすでに衰勢をみせており、奈良晒も他国布に押されて享保年間（1716～1736）頃から次第に衰え、生産を減らしていく。墨だけは盛況を維持したものの、随一の産業奈良晒が衰退しては町の沈滞は免れなかつた。元禄年間（1688～1704）頃を頂点に人口も減少、幕末には約2万人余を数えるにすぎなくなる。ほぼ大仏殿の再興を画期として、奈良は産業の町から観光の町へとその姿を変えていくことになった。名所記・案内書の類の刊行に伴って「名所としての奈良」の認識が広がり、寺社詣を兼ねて遊覧に奈良を訪れる人々が増えてきた。文化10年（1813）の「大日本名産図会」に奈良人形、井伝、練鹿、なら茶めし、奈良漬があげられ、先に掲げた「大和国細見図」に、奈良人形、練鹿、鹿角細工のほか、火打焼・蕨餅などのいわゆる土産ものが登場してくるのは、観光化のあらわれであると考えられる。

町民の間で俳諧が盛んに行われ、近世中期の奈良俳人として池西言水が知られるが、享保年間以後流行する狂歌に杉岡宵眠が現れ、その弟子に「平城坊目考」を著した久世宵瑞があつた。奈良の医師で俳人としても名のあ

った村井古道は、享保15年奈良町の本格的な地誌「奈良坊目拙解」を著した。彼には、このほか「南都年中行事」など奈良についてのいくつかの述作があり、古道は近世奈良を代表する文人であった。幕末には古市村の北浦定政が、平城京や条里制の研究に従い、「平城宮大内裏跡坪割之図」を遺して平城宮跡研究の先駆けとなった。現在一刀彫の名で知られる奈良人形は、春日若宮祭の田楽の笠や盃台の飾りにつけた人形が起源だといわれるが、近世に入って岡野家初代松寿がその様式を確立、近世後期に9代目保久、10代目保伯が名産としての名を高め、次いで森川杜園が出て、芸術作品としてこれを大成する。西ノ京の名産とされた土風炉は、近世「奈良風炉」の名で茶人に迎えられたが、17世紀末頃から赤膚焼が起り、幕末に青木木兎・奥田木臼が出てその基礎を固めた。

元和元年(1615)の「南焼け」をはじめとして、いくたびか大火に見舞われ、享保2年には興福寺の大半が炎上したが、宝暦12年の大火では、3,000戸ともいわれる家屋が焼失した。安政元年(1854)には奈良ではまれな大地震が起り多数の家屋が倒壊、300人ももの死者も出た。天明の飢饉は奈良にも及び、天明7年(1787)には打毀も起り、天保の飢饉、とりわけ天保8年の惨状は深刻で、奉行所の調べでは、施行を望む難渋人は8,700人にも及んだという。

天保2年に着任した奈良奉行梶野良材は、翌年奉行所付属の講学所明教館を設立、若年の森川杜園を御用絵師に取り立てて杜園の号を与えたことで知られるが、幕末の名奉行とうたわれたのは川路聖謨であった。聖謨は弘化3年(1846)から5年半在任。裁判の公正と促進、賭博や盗難の取締り強化に努め、貧民や老人に対する福祉制度を実現するとともに興福寺・東大寺境内への桜や楓の植樹事業を達成した。

### (5) 近代

明治元年の神仏分離令によって春日社と一体となっていた興福寺がとりわけ大きな打撃を受け、明治4年の上地令によって、多くの寺院は窮地に立たされた。興福寺は一時空家同然となり(明治5年廃寺、同17年再興)、一乗院門跡は県庁にあてられ、大乗院門跡をはじめ多くの建物が売却され、五重塔が売りに出されるということもあった。他方、文明開化の波は奈良にも及び、明治5年5月には奈良で初めての新聞日新新聞(旬刊)が発刊され、その前後西寺林に牛肉店ができ、中院に散髪屋も開かれている。また、同年1月から人力車の営業が始まり、県庁が若草山で乳牛を飼い、長崎から林三圃を招いてコンデンスミルクなどをつくったりしている。

明治21年市町村制が公布され、翌22年4月奈良町が発足した。旧奈良市域に属する奈良町周辺部では、東部山間部に柳生・大柳生・狭川・東里・田原の諸村、南部に辰市・明治・東市・帯解・五ヶ谷の諸村、西部に佐保・大安寺・都跡・平城・伏見・富雄の諸村が成立した。

明治23年大阪鉄道会社によって奈良～王寺間に鉄道が開通、同25年になって大阪に通じた。次いで同29年奈良～京都間に、同33年に奈良～桜井間にも鉄道が開通した。名古屋～大阪間を走る関西鉄道が、同31年に加茂から奈良に路線を延ばし、俗に大仏鉄道と呼ばれたが、同38年これを木津回りに切り替え、翌年大仏線を廃止した。江戸中期から京都口より大阪口が次第ににぎわいをみせていたが、鉄道の開通はその傾向を一段と強め、かつて旅宿の多かった手貝通りにかわって三条通に旅館が増えていった。

明治のはじめ、墨を除いて奈良にはめぼしい産業がなかったが、明治10年勝村直助が紡績糸を用いて綿蚊帳を始めたのがきっかけで、明治20年代に入って蚊帳・蚊帳地の生産が伸びた。明治29年の統計では、その生産価格が群を抜き、次いで織物・墨・漆器・筆と続き、一桁下がって団扇・湯茶・銘酒・奈良漬の順になっている。しかし、墨などの伝統産業はもちろん、蚊帳にしてもやっと蒸気乾燥機をもつ程度で、いずれも近代工業からは程遠いものであった。

観光の面では活発な動きがみられた。明治23年(1891)倭馬車会社がつくられて乗合馬車の営業を始めている。また、明治26年(1894)には、奈良遊園会社が設立され、奈良公園内に諸施設をつくり観光客誘致に努めた。奈良公園は、これより先、明治13年(1880)に興福寺境内と春日野が公園の指定を受けたのに始まるが、明治21年(1888)に東大寺境内・浅茅ヶ原から瑜伽山・春日山・若草山にわたる広大な地域を編入してその基礎が定まった。帝国奈良博物館(現奈良国立博物館)ができる明治28年(1896)前後にその整備が進められ、ほぼ今のよ



図 明治中期頃の奈良町(復元模型図)

資料：景観・創造・まちづくり奈良町(奈良市都市計画部計画課)

うな形に整った。観光都市としての素地が次第に固まってくるにつれて観光客が増え、明治29年(1897)には宿泊者が12万人を突破し、1,120人の外国人が奈良を訪れている。また、明治42年(1909)には鉄道院の手により奈良ホテルが開業している。大正3年(1914)4月には、大阪電気軌道(大軌)により奈良～大阪上六間(現近鉄奈良線)が開通し、奈良を一段と大阪に近づけることになった。

文化面では、大正14年(1925)に志賀直哉が、京都山科から奈良市幸町に移り住み、昭和4年(1929)に奈良公園に隣接する高畑に居宅を建設。昭和13年(1938)に鎌倉に移り住むまでの10年間をこの家で過ごし、『暗夜行路』『痴情』『プラトニック・ラブ』『邦子』などの作品を執筆している。その後、武者小路実篤、小林秀雄、尾崎一雄、若山為三、小川晴暘、入江泰吉、亀井勝一郎、小林多喜二、桑原武夫などの白樺派の文人や画家・文化人が志賀を慕って訪れ、文学論や芸術論などを語り合う文化サロンとなり、「高畑サロン」と呼ばれるようになった。

近代産業の発展に立ち遅れた奈良は、大正期でも、就学率の向上や習字教育の普及によって生産を伸ばした墨・筆のほか、漆器などの伝統産業が高い比率を占め、昭和に入ってようやく蚊帳の生産が第一位にあがる。しかし、昭和10年(1935年)でもなお墨が第2位を維持しており、市勢要覧では「本市産業の面目は矢張り古い伝統を有する特産工業品にある」と記されている。

旧奈良市域の西部や南部の農村では、米の生産が向上し、明治末年反当収量が2石を大きく上回り、「奈良段階」といわれるほどの高い地位を誇った。蔬菜の栽培が盛んになって次第に近郊農業の色合いを強め、明治末年から辰市がタマネギの特産地となり、昭和に入って都跡・富雄でスイカの栽培が進んだ。田原を中心に、東部山間では、引き続き茶の栽培が盛んであった。

明治期末には、餅飯殿通りが商店街として形を整えるようになり、大軌の開通後、東向通りが商店街として発展するようになった。また、明治初期の大きな打撃を受けた奈良の寺々も、明治30年(1898年)古社寺保存法が公布されてようやく復興の気運に向かい、その最大の事業が大正2年の大仏殿の修理であった。一方、明治32年には平城宮跡の大極殿跡が明らかにされ、保存運動が実を結んで大正11年平城宮跡が国史跡に指定されている。また、同年、奈良公園も国名勝の指定を受け、東大寺旧境内も昭和7年に国史跡に指定され、大正中頃から昭和にかけて大仏殿から県公会堂(明治36年開設)への道筋にナンキンハゼを植えるなど、奈良公園の整備が進められ、昭和7年には春日神社万葉植物園も開かれている。

## (6) 現代

太平洋戦争に突入するとともに、昭和17年に社寺境内地の樹木の出陣が決定され、翌年からは奈良公園の松から松根油をとることも命じられた。昭和20年に入ると、寺院の仏像の疎開が始まり、3月の大阪大空襲後奈良に移ってくる戦災者や疎開者が増えた。奈良は数回の空襲や若干の戦災を受けただけで終戦を迎えたため、被害は少なく、数多くの伝統的建造物を残すことができた。

その後、昭和30年前後から西部地区を中心に宅地開発が進んで住宅が急増、当時約13万人を数えた人口は、約20年後の昭和52年には2倍を超えて27万3,000人に達している。大規模な住宅開発は、昭和25年に近鉄によって着手された学園駅南方の開発に始まり、昭和30年代に入って不動産会社が争って開発を進め、日本住宅公団もまた、学園前を手始めに、紀寺・鶴舞・富雄・西大寺・桂木・中登美と相次いで住宅団地の建設を進めている。昭和40年代頃からは旧市街地(奈良町周辺)も都市化が進み、伝統的町家の建替えやミニ開発によって町並みに変化していった。こうして、奈良は大阪のベッドタウンとしての性格を強め、従来の観光都市に加えて住宅都市としての側面を併せ持つようになった。

このような状況のもと、古都奈良における歴史的風土を保存・継承していくため、昭和41年に「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」に基づく「古都」に指定され、春日山などが歴史的風土特別保存地区に指定された。

昭和50年代半ばから、人口の流出・減少が起り始め、町の活力が低下し始める。この頃から、全国的に町並み保全の重要性が認識されるようになり、奈良市においても昭和50



図 昭和29年頃の三条通り

資料：古都の暮らし・人(入江泰吉)

年（1975年）の都市計画道路の事業決定に伴い、伝統的町家を取り壊される事態に対して、昭和56年（1981年）から昭和62年（1987年）の7年にわたり町並み調査が実施された。

平成2年（1990年）3月には奈良市都市景観条例を制定し、平成6年（1994年）4月に「奈良町都市景観形成地区」を指定、地区内の建造物の位置・構造・外観の意匠などについて「景観形成基準」を定め、建物の新築・改築・増築・外観の修繕・模様替え・色彩の変更などを行なう場合は届出を義務付け、景観形成基準に基づき助言・指導を行なうとともに、必要な助成を行なっている。

平成10年（1998年）12月に京都で開かれた第22回世界遺産委員会で、「古都奈良の文化財」の世界遺産リストへの登録が決定している。

## 2. 説話・伝承等の整理

説話・伝承を以下の文献を参考に整理する（継続作業中）。以下に一部事例を示す。

- ・「奈良市史」 (奈良市市史編集審議会)
- ・「大和の伝説」 (大和史蹟研究会)
- ・「ならまち一祭りと祈りー」 (奈良町資料館) 奈良町資料館
- ・「子供のための大和の伝説」 (仲川明) 奈良新聞出版センター
- ・「 同上 (続)」 (乾健治) 奈良新聞出版
- ・「奈良のふるさとのほなし」 (乾健治) 奈良新聞出版センター
- ・「奈良県の民話」 (奈良児童文学者協会) 偕成社
- ・「奈良の伝説」 (岩井宏実・花岡大学) (株) 角川書店
- ・「奈良の歴史ものがたり」 (編集委員会) 日本標準
- ・「奈良大和路の昔ばなし」 (島本慈子・大植増隆) (株) フジタ

表 奈良市の説話・伝承

タイトル (場所)	説話・伝承の内容	出典
「背後に鳥居のある社」 (猿沢池)	<p>奈良の猿沢の池には、東の岸に衣掛柳というのがあり、西の池畔には采女神社というのがある。その社は、池に背を向けて西向きに立ち、背後に鳥居がある。日本中でうしろに鳥居のある神社は、ここただ一つだといわれている。</p> <p>昔、奈良のみかどに仕えた采女という美人があった。御目のとまって、一度みかどに召されたが、どうしたものかその後は召されなかった。采女は世をはかなく思い、猿沢の池に身を投げた。その時、衣をかけておいた柳が、東の池畔の衣掛柳である。みかどは、深く哀れにおぼしめされ、池にみゆきして人々の歌を召された。</p> <p>柿本人丸の歌 わぎもごがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき みかどの歌 猿沢の池藻つらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし</p> <p>その後、西の池畔に采女の社を建てられた。初めは池に向かって社殿を設けられたのに、みずから命を落とした水面を見るのは恨めしいとあって、一夜の中にクルリと西向きになってしまったという。</p>	「大和の伝説」 (山田熊夫)
「不審ヶ辻子」 (不審ヶ辻子町)	<p>奈良の御所馬場と鶴福院町との間に通じる東西の狭い横町を不審ヶ辻子、俗にフシンガズシと呼んでいる。</p> <p>昔、御所馬場に、松浦という長者が住んでいた。ある夜、ひとりの賊が忍びこんだ。長者はこれを捕え、現在奈良ホテルのある鬼隠山から谷底へ投げ込んで殺した。その後、賊の魂が鬼と化し、毎夜、元興寺の鐘楼に待ち受けて、鬼と激しく格闘し、まだ勝負のつかないうちに夜が明けてきた。夜が明けてはと、鬼はあわて</p>	「大和の伝説」 (山田熊夫)

	<p>て鬼隠山の方へ逃げ出した。法師も続いてその跡を追ったが、今の不審ヶ辻子の辺までいった時、たちまち鬼の姿が見失われた。そこからこの地名が出たという。</p> <p>また、この元興寺の鐘楼にあった鐘は、現に奈良市高畑町の新薬師寺鐘楼にかかっている。当時格闘のときの鬼の爪あとというのが、その方側にたくさん残っている。</p>	
庚申信仰 (奈良市(奈良町))	<p>庚申信仰は中国の道教の教えを説く。60日に1度回ってくる「庚申」の日に、人々は青面金剛像をまつり、夜を徹して祈る風習が江戸時代に庶民の間で広まった。言い伝えによると、人が寝ている間にカラダの中にある三尸(さんし)の虫が口から出てきて昇天し、その人の悪事を天帝に告げにいくという。報告を受けた天帝は、その人に罰を与えるという。それが嫌で人々は庚申の日の夜は寝ずに供養したといわれている。</p>	「ならまち一祭りと祈りー」
山上講 (餅飯殿町)	<p>餅飯殿町の宗像神社には餅飯殿山上講の大先達である箱屋勘兵衛の像をまつる。</p> <p>役行者の大峰山開山後、年月が経ち大蛇が参詣の邪魔をしていたところ、東大寺の高僧理源大師がこれを封じて再開、その折に、この町の箱屋勘兵衛らがお供をしたのが同町山上講の起こりという。</p> <p>町では毎年8月に大峰山上参りを欠かさない。</p>	「ならまち一祭りと祈りー」
蛙石 (中院町)	<p>元興寺極楽坊内に蛙の形をした大石がある。昭和33年7月に、もと大阪城にあったものをここに遷したものである。</p> <p>蛙は吹くがかえるとか、客を引くといった縁起のよいものとされているが、この蛙石はそれとは反対に人々の死を招く石といわれている。大阪城の乾(西北)の角で堀に向かっていたが、この石に登ると堀へ飛びこみたくなるといわれ、昔はこの石から堀に身を投げるものが多かったので、枳殻で二方を囲っていた。また、他の場所で身投げしても、この石の付近に浮かび上がってくるといふ、ふしぎな威力を持った石といわれていた。</p>	「奈良市史」
魚養塚 (十輪院町)	<p>魚養塚は十輪院内にある。遣唐使(吉備真備という)が中国に滞在中、彼地の婦人と親しくなり子供までもうけた。遣唐使が帰国する際、「今後、遣唐使が入唐する時は必ず消息を知らせる。子供が母親の手から離れるようになれば迎えに来る」と約束したが、その後は何の便りもしなかった。そこで母親は子供の首に札をつけ海に流した。子供はさいわい魚に助けられ、ようやく難波の浦に着き、ふしぎの縁で父に直面し魚養と名付けられた。魚養は成長して医術と書道に名をなし、十輪院を建立したという。</p>	「奈良市史」
蜂屋の跡 (納院町)	<p>納院町に蜂屋神社がある。今から四百年程前、蜂屋紹佑という有名な茶人が住んでいた。大金持ちで時の人は蜂屋殿と呼んでいた。紹佑は金銭は減り易いので子供に伝え難いからと、井戸を掘り砥石を積み重ねて金を埋めておいた。曾孫の代になり蜂屋もついに貧乏になったので、井戸を掘り返したところ砥石はすべて墮石となり、金も見当たらず、家は衰えてしまったという。現在蜂屋神社になっているところがその跡という。</p>	「奈良市史」
鳴川町 (鳴川町)	<p>昔、護命僧正が小塔院に住し、毎日読経に精進していた。ところが蛙がやかましく鳴きたてるので神呪をとなくて鳴声を止めた。それで不鳴川と呼ばれていたが、いつの間にか鳴川になったと『坊目拙解』にあるが、里の伝えでは、昔、弘法大師が十輪院で読経中に蛙がしきりに鳴いたので、大師は下流に行つて鳴くようにといわれたので、蛙は下流において鳴くようになった。そこ</p>	「奈良市史」

### 3 . 詩歌等の整理

7世紀後半から8世紀後半頃の日本に現存する最古の和歌集である「万葉集」には、奈良市を舞台とした歌が数多くみられ、現在の奈良市の景観・眺望景観をより味わい深いものとしている。以下に、万葉集に詠まれた奈良市の例をあげる。

○万葉集に詠まれた奈良市（例）

- |      |   |     |
|------|---|-----|
| 231  | 高円の 野辺の秋萩 いたづらに 咲きか散るらむ 見る人なしに (笠金村歌集)      |     |
| 300  | 佐保過ぎて 奈良の手向けに 置く幣は 妹を目離れず 相見しめとぞ (長屋王)      |     |
| 328  | あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり (小野老)        |     |
| 330  | 藤波の 花は盛りに なりにけり 奈良の都を 思ほすや君 (大伴四綱)          |     |
| 502  | 夏野行く 牡鹿の角の 束の間も 妹が心を 忘れて思へや (柿本人麻呂)         |     |
| 593  | 君に恋ひ いたもすべなみ 奈良山の 小松が下に 立ち嘆くかも (笠女郎)        |     |
| 992  | 故郷の 飛鳥はあれど あをによし 奈良の明日香を 見らくしよしも (坂上郎女)     |     |
| 1048 | たち変り 古き都となりぬれば 道の芝草 長く生ひにけり (田辺福麻呂歌集)       |     |
| 1112 | はねかづら 今する妹を うら若み いざ率川の 音のさやけさ (作者不明)        |     |
| 1433 | うち上る 佐保の川原の 青柳は 今は春へと なりにけるかも (坂上郎女)        |     |
| 1554 | 大君の 御笠の山の 黄葉は 今日の時雨に 散りか過ぎなむ (大伴家持)         |     |
| 1604 | 秋されば 春日の山の 黄葉見る 奈良の都の 荒るらく惜しも (大原今城)        |     |
| 1879 | 春日野に 煙立つ見ゆ 娘子らし 春野のうはぎ 摘みて煮らしも (作者不明)       |     |
| 1887 | 春日なる 御笠の山に 月も出で ぬかも佐紀山に 咲ける桜の 花の見ゆべく (作者不明) |     |
| 3011 | 我妹子に 衣春日の 宜寸川 よしもあらぬか 妹が目を見む (作者不明)         |     |
| 3835 | 勝間田の 池は我れ知る 蓮なし しか言ふ君が 鬚なきごとし (婦人)          | 他多数 |